青野原俘虜収容所捕虜兵のスポーツ活動

岸本 肇

**Sportliche betätigungen der Gefangenen im
Kriegsgefangenenlager Aonogahara**

Hajime Kishimoto

Zusammenfassung

Dieser Artikel versucht, anhand der Dokumente, Zeitungsartikel und Fotos die sportlichen Betätigungen deutscher Kriegsgefangener im Kriegsgefangenenlager Aonogahara in der Präfektur Hyogo während des Ersten Weltkriegs aufzuzeigen. Als Ergebnis der Untersuchung läßt sich zusammenfassend aussagen: 1) Bei den Disziplinen, die die Kriegsgefangenen im Lager trieben, handelte es sich hauptsächlich um Turnen, Fußball, Tennis, Kegeln, Faustball, Schlagball, Billiard und Ausflüge. Im Vergleich mit den anderen Kriegsgefangenenlagern in Japan bestent kaum ein Unterschied in den Disziplinen. 2) Unter den Sportorganisationen im Lager etablierte sich der Turnverein am besten. 3) Das Turnfest und das Leichtathletikturnier zählten zu den größten Veranstaltungen im Lager. 4) Als sportlicher Austausch mit der einheimischen Bevölkerung wurden Fußballspiele mit Mannschaften des örtlichen Gymnasiums und der Lehrerbildungsanstalt durchgeführt. 5) Einem Ersuchen der Kriegsgefangenen, aktiv Sport treiben zu dürfen, wurde von der Lagerverwaltung stattgegeben. Jedoch waren die Bedingungen für die Ausübung von Sport nicht für alle Gefangenen einheitlich. 6) Der Waffenstillstand bot den Gefangenen die große Gelegenheit, ihre sportlichen Betätigungen weiter zu entwickeln. 7) Die Lagerverwaltung hielt der Sport für effektiv, nicht nur um die Gesundheit der Gefangenen zu erhalten, sondern auch um ihre Langeweile vorzubeugen.

Schlüsselwörter : der Erste Weltkrieg, Deutschland, Kriegsgefangene, Turnen**(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 50: 285-294, May, 2005)**

キーワード：第1次世界大戦，ドイツ，捕虜，ト
ウルネン

I はじめに

青野ヶ原^{註1)}は、兵庫県明石市の北方約30km
に位置する丘陵である。ここに、いまは自衛隊の

駐屯地と演習場があるが、かつて陸軍演習場があった。その一角に、第1次世界大戦中、青野原俘虜収容所^{注2,3)}（以下、青野原収容所と略す。他の収容所についても初出後は同様に略す）があった。収容されていたのは、中国山東省青島における日独戦争の際、日本軍の捕虜となったドイツ軍兵士である。当時、日本にはドイツ軍捕虜兵^{注4)}用に12収容所あったが、それらは最終的に6収容所に統廃合された。青野原収容所はその中の1つであり、1914年11月11日から開設されていた姫路俘虜収容所が、1915年9月20日に青野ヶ原に移転した収容所である。そこから、最後の捕虜兵が帰国したのは1920年1月27日である。

青野原収容所には、1918年4月の統計³⁵⁾によると、日独戦争の捕虜総人数の約1割477人が収容されていた。その内訳において、ドイツ兵とオーストリア・ハンガリー帝国兵がほぼ半々ということと、特にオーストリア・ハンガリー帝国兵の人数が、日本に囚われていた同帝国捕虜兵の約8割ということが、他収容所の人数構成と異なる特徴であった。

そのような青野原収容所であるが、板東俘虜収容所のように一般に知られていないし、これまでほとんど研究もされていない。その大きな理由として、板東収容所における“Die Baracke”^{注5)}、松山俘虜収容所における“Lagerfeuer”^{注6)}のような「収容所新聞」の類が見当たらないことがある。捕虜兵の母国側においても、第1次世界大戦に関する研究や記録等を1931年に集録した“In Feindeshand”³⁴⁾が、日本にある捕虜収容所の1つとして青野原収容所を挙げている程度である。比較的最近のKlein¹²⁾の研究においても、同様である。しかしながら1992年以降、兵庫県小野市の市史編纂作業の過程において、青野原収容所捕虜兵の生活と諸活動に関する史料が収集され²²⁾、彼らのスポーツ活動について一般史研究者の関心も引いている¹³⁾。

第1次世界大戦中、日本に抑留されていたドイツ軍捕虜兵のスポーツ活動に関する研究は、これまでそのすべてが山田³⁸⁾に依拠していたといっても過言ではない。山田は、その中で、捕虜兵の

文化・スポーツ活動に「寛大」であったとされる板東収容所においても、そうではなかったとされる久留米俘虜収容所、松山収容所においても、スポーツをする組織があり、多様なスポーツ活動が展開していたことを明らかにしている。しかし青野原収容所に関する山田の知見は、それが主要な研究対象ではない限界から、「体操班」の日課的活動の指摘⁴⁶⁾と、テニス施設存在の推察⁴⁵⁾に止まっている。

そこで本研究においては、そのように不透明な青野原収容所捕虜兵の姫路収容所時代を含む5年3ヶ月の間のスポーツ活動に関して、種目と行事、組織、地域交流、捕虜兵の要求と日本側の管理方針等について、下記の史料をもとにして事実や内容を解明することを主たる目的とする。

本研究で用いる文書、新聞以外の主たる史料は、元捕虜兵の日記^{注7)}、スポーツ関係の写真である。その中の多くは、Laan^{注8)}経由で小野市史料編纂室へ寄贈されたものである。写真は、筆者がSchmidt^{注9)}から直接提供を受けた。板東収容所における“Unser Turnen in Bando”^{注10)}、久留米収容所における“Turnen und Sport”^{注11)}のようなスポーツ関係の出版物は、青野原収容所に関しては未発掘である。

なお、以下の論述に際して、近年、それぞれの市教育委員会が研究に取り組んでいる久留米収容所と習志野俘虜収容所に関する知見も引用して、青野原収容所におけるスポーツ活動を特徴づけるようにする。

II 青野原収容所におけるスポーツ活動の展開

1. スポーツ種目の分布

捕虜兵が帰国した後に俘虜情報局が編纂し、1920年7月15日に陸軍大臣田中義一に提出した『大正3年乃至9年戦役俘虜顛末』²⁸⁾では、姫路収容所と青野原収容所における捕虜兵のスポーツ活動について、「…彼等ハ各自日課ヲ定メ比較的規則正シク勉強シヨク運動セリ…」〔注〕下線筆者〕と総括している。そして具体的に、「郊外散歩」「撞球等ノ競技」「蹴球『テニス』拳闘、体操等の

諸運動」を挙げている。そのうち、蹴球と撞球、すなわちサッカーとビリヤードの様子は、同じ俘虜情報局により捕虜兵の抑留中に作成された写真集で窺うことができる⁴⁾ 注12)。

当時の新聞記事と国内文書記録をもとにして、青野原収容所捕虜兵の主たるスポーツ活動について、記載された日付順にまとめたのが表1である。

これによると、最初の約10ヶ月間、姫路時代は遠足と収容所の寺院境内でできる程度の運動であったが、青野ヶ原に移ってからスポーツらしい種目が増えていることがわかる。場所が広くなり、捕虜生活がそれなりに落ち着いたからであろう。そして例えば、サッカーは週1、2回、遠足は月1、2回の頻度で、ビリヤードは営業活動として実施されていたこともわかる^{注13)}。

元捕虜兵の当時の日記、帰国後の回想録の中でも収容所におけるスポーツの様子が散見される。Kerstenは、「1個ボールが寄贈されると、退屈しのぎに、サッカーとファウストバルの熱狂者が現れた。ボールで寺の屋根瓦や塀を損壊した。空のビール瓶を売った金でダンベルを調達した。鉄棒も設置した」⁷⁾ 注14)、「(青野ヶ原に移ってから)よくスポーツをするようになった。…週1回、サッカー、シュラークバル、ケーゲル等を収容所の外側ですることを許された」⁸⁾と日記に止めている。ダンベル運動や、新聞に表記されている種目名(表1参照)ではわかりにくかったファウストバル、シュラークバル、ケーゲルもやられていたことがわかる。オーストリア・ハンガリー帝国兵で男爵の称号を持つ海軍中尉であったKuhn^{注15)}は、組立て体操のピラミッドの光景を“Turnübungen in Aonogahara”(青野ヶ原におけるトゥルネン運動)の見出しをつけた写真で示し、さらにテニスコートを2面づくり、トゥルネン器械を立てたと、回想している³⁶⁾。

水泳については、兵庫県加東郡社町大門の蓬萊家^{注16)}に、夏季になると同家すぐ西側、加古川の川港があり軍隊や学校の水泳訓練の適地であった場所へ、捕虜兵が来ていたという話が先代から伝わっている。

以上のような青野原収容所捕虜兵のスポーツ活

動の種目分布は、山田による「日本国内のドイツ兵俘虜収容所における体育・スポーツ活動」表⁴⁷⁾にあるものと基本的には同じである。ただし、板東収容所³⁹⁾や久留米収容所³¹⁾においてはその「クラブ」^{注17)}まで組織され、習志野収容所¹⁹⁾でも盛んであったホッケーに関しては、表1に記載がないごとく、青野原収容所においては新聞で紹介されるほど目立っていなかったようである。

2. スポーツ行事

1917年10月30日、スペイン公使が青野原収容所を視察に訪れている。下の引用文は、そのときの収容所長宮本秀一中佐の「口演要旨」²⁵⁾からの抜粋である。

六、娯楽の件

3、体育ニハ非常ナル興味ヲ有スル結果当春ヨリ体操会ヲ実施シ時々競技会ヲ開催シ日夜練習ニ余念ナシ最近ニ於テ九月十七日ニ一回実施シ来ル十一月四日ニモ実施スル計画ヲナシツツ、^(ママ)アリ [注] 下線筆者]

図1から、“TURNFEST-AONOGAHARA 1917”(トゥルネン祭 青野ヶ原 1917)が読み取れるが、この写真は上記の引用文にある「競技会」に関係する印刷物であろう。

1917年といえば、捕虜兵の抑留3年目に当たる年である。「我等ハ日本ノ俘虜トナリテ既ニ三ケ年ヲ経過セル今日ナレハ今少シ自由ヲ与ヘラル、様取計レ度」²⁵⁾とする収容所側の捕虜兵管理姿勢の軟化が、そのような組織的なトゥルネン活動を容認する背景にあったと考えられる。ちなみに、板東収容所の開設は、1917年4月である。

Kerstenの日記には、次のように、サッカー、陸上競技、テニス等の行事もあったことが記されている。「サッカー以外にも、2、3のスポーツ行事が開催された。走、跳、投の試合で、私は1500m走と3種競技(100m、やり投げ、高跳び)に出場した。われわれの『金持ち』から賞金として10円ずつ提供されることもあった。…収容所内で、われわれはもっと小規模な行事も開催した。その1つがテニスの試合である」⁶⁾。

上の引用文は、日記の中で、展覧会の思い出に

表 1 青野原俘虜収容所捕虜兵の主なスポーツ活動

年月日	戦況の推移と捕虜兵の動向	スポーツ等の内容	出典
1914.6.28	サラエボ事件 オーストリア皇太子がセルビア青年に暗殺される		
7.28	第1次世界大戦勃発		
8.23	日本がドイツに宣戦布告		
8.25	日本がオーストリア・ハンガリー帝国に宣戦布告		
10.31	日英連合軍青島ドイツ要塞へ総攻撃開始		
11.7	青島ドイツ軍降伏		
11.13	捕虜兵の姫路収容所(3寺院に分散)への収容開始		
11.22		毎朝、食後に境内で<運動>	鷺城新聞
12.2		姫路城へ<遠足>	神戸又新日報 鷺城新聞
12.4		<木片のラケット>でテニス(<フット、ボール>が、境内が狭くできないため)	神戸又新日報
12.5		「狭隘な庭園で型ばかりの<アセッション式のフットボール>」	神戸又新日報
1915.1.7		市川へ<遠足>	大阪朝日新聞
4.6		夢前川へ<遠足>	大阪朝日新聞
6.7		広峰山へ<遠足>	大阪朝日新聞
9.20	姫路収容所から青野原収容所へ移動		
12.22		・<ケエゲルパン><ケエゲルクゲー■(読み取り不能)>の<グラウンド>を設計、建設 ・毎週水曜日、日曜日に、<フットボール>などの<競技>を許可 ・テニス、<欧州撃剣>等もやっている	神戸又新日報
1916.5.17		・青野ヶ原では所内で運動ができるので、姫路の頃ほど外出したがない、「漸く12回外出」 ・所内では運動は怠らずにやっている	神戸新聞
5.24		・「俘虜の玉突き屋開業」 ・毎週月、水の両日は構外で<フットボール>	神戸又新日報
8.23		「…稀ニ引卒外出ヲナシ運動シツ、アリ…」	文献 23)
1917.10.30		「一、俘虜ノ起居ノ状態」 所内では自由に<散歩><遊戯>ができる 「六、娯楽ノ件」 ・所外では、ほぼ週1回、半日または終日、<郊外散歩>と<フットボール><ベースボール>等を許可 ・所内では<自由の娯楽><テニス> ・<体操会>が組織され、<競技会>を開催	文献 25)
11.23		「テニスコートで無邪気なく遊戯>」	神戸又新日報
1918.11.11	休戦条約		
12.13—20	展覧会	陸上競技大会(開催日特定できず)	文献 6)
1919.5.22		・<散歩>の途中に、小野中学校蹴球部とサッカー試合 ・その後数回、小野中学校が青野ヶ原へ行き、サッカーの試合をする	文献 5)
6.28	ベルサイユ条約		
7.13		姫路師範学校と小野中学校が「獨逸俘虜と球戦」	大阪朝日新聞
9.10	サンジェルマン条約		

12.25

宮本収容所長談

神戸新聞

- ・月1, 2回郊外に＜日帰り旅行＞で＜山登り＞をさせた
- ・＜教練＞等の時間後には, 自由にテニス, 野球, ＜バレーボール＞, その他の＜運動競技＞をさせていた

12.27 第一陣神戸より帰国

1920.1.27 最後の捕虜兵を送り出す

2.29 青野原収容所残務整理終了, 閉鎖

4.1 青野原収容所廃止

注1) 「」は引用を示す。＜＞は原文どおりの表現であることを示す。

注2) 出典が新聞の場合, 年月日はそれが報道された日付である。

注3) ＜フット, ボール＞＜フートボール＞はフットボール, 明らかにサッカーである。＜アセッション式のフットボール＞はアソシエーション（式）フットボール, これもサッカーである。

注4) ＜ケエゲルバン＞はケーゲルバーン, すなわちドイツ伝統の「ボウリング」であるケーゲルのレーン, ＜ケエゲルクゲー■＞はケーゲル用のクーゲル（ボール）であろう。

注5) ＜ベースボール＞と野球は, ドイツ伝統のクリケット風球技であるシュラークバルをさしているか, 書き手の勘違いであろう。

注6) ＜バレーボール＞は, 拳でボールを打つドイツ式の「バレーボール」であるファウストバルをさしているか, 書き手の勘違いであろう。

図1 “TURNFEST-AONOGAHARA 1917”
(Schmidt 氏所蔵)

連続して書かれている。青野原収容所における展覧会開催²⁶⁾は, 1918年12月の「青野原俘虜収容所ドイツ・オーストリア・ハンガリー兵製作品展覧会」²⁾の1回だけである。そのことから判断すると, 大規模な陸上競技大会は, その開催期間中

かその前後の時期に開催されていた可能性が高い。

その規模や頻度は別にして, 青野原収容所でも, 板東収容所⁴¹⁾, 久留米収容所³¹⁾, 習志野収容所¹⁹⁾のように, トウルネン祭, 陸上競技大会の行事, サッカー, テニスの試合等が開催されていたのは間違いないと考えられる。

3. スポーツ組織と組織上の民族問題

板東収容所にはスポーツ活動全体を統轄する「スポーツ委員会」³⁹⁾が, 久留米収容所には運動場の使用割当てを調整する「運動場管理委員会」⁴³⁾が, 松山収容所には競技大会を掌る「競技委員会」⁴⁴⁾があったことを, 山田は明らかにしている。そして, それら「委員会」のもとで活動していた各種スポーツの“Verein” “Vereinigung” “Gesellschaft” に, それぞれ「クラブ」の訳語を当てている^{注18)}。

そのように「委員会」を立ち上げてスポーツ活動を管理・運営するやり方は, 軍隊的生活を送っていた捕虜兵の世界だけに特有ではない。例えば, 第1次世界大戦中, イギリス人の「軍役年齢の文民」(civilian of military age)を収容していたベルリン郊外の“The Ruhleben Prison Camp”

図2 “TURNVEREIN AONOGAHARA 1919”
(Schmidt氏所蔵)

にも、「スポーツ統制委員会」(The Sports Control Committee)¹¹⁾があった。

青野原収容所においても、スポーツ活動のための何らかの「委員会」や種目別「クラブ」があったと推定されるが、現在、スポーツ組織でその存在が確認できるのは“TURNVEREIN IN AONOGAHARA 1919”の写真(図2)によるトゥルネンクラブのみである^{註19)}。

〈I〉で説明したように、青野原収容所には、ドイツ兵以外にオーストリア・ハンガリー帝国兵もいた。特にオーストリア・ハンガリー帝国兵の民族構成は多様で、言語、宗教の違いもあり、彼らの間で争論が絶えなかったという¹⁷⁾。スラブ系兵(チェコ人、ポーランド人、クロアチア人)約50人を、他の捕虜兵の集団が、収容所から追い出そうとした事件も起こっている¹⁰⁾。しかし、そのような軋轢に伴うスポーツ実施上の問題については、オーストリア・ハンガリー帝国士官であったKuhn³⁶⁾も書き残していない。

前節冒頭で述べた1917年10月のスペイン公使の青野原収容所訪問は、オーストリア・ハンガリー帝国兵の視察が主たる目的であったが、そのと

きの日本側報告文には「…公使ハ一週間ニ二回郊外運動ヲ為シ得ルヲ以テ満足セサルヘカラストイイタリ」²⁵⁾以外に、スポーツへの配慮事項は何も記載されていない。

新聞が「將校兵卒の隔たりなく」¹⁷⁾とか「今日は日曜日とて何れも喜んで遊んでゐる。独逸俘虜何れも」¹⁴⁾〔注〕下線筆者〕と報じている例があるように、表面的には、スポーツする捕虜兵の様子は階級にも民族にもとらわれていないと見えていたのだろう。

III スポーツの地域交流

「本年〔筆者注〕1919年」五月二十二日午後蹴球部が小會を催さんとするや、ゆくりなくも彼の青野原の一隅に窺めらるゝ、俘虜の団体百五十餘名監督官に引率せられて散歩しつゝ本校〔筆者注〕旧制兵庫県立小野中学校〕門前にて休憩するに逢う」⁵⁾。そして、たちまち両者間に「情意相投ずるものありしにや」⁵⁾、サッカーの日独対抗戦が始まった。試合後、捕虜兵はさらに「器械体操の運動振を演じ」⁵⁾、小野中学校側は「剣、柔道の仕合及

柔道形⁵⁾を見せている。

「これが縁となり其後我よりも數回青^(ママ)野原に出掛け彼^(ママ)と練習的仕合をなし、頗得る所ありき⁵⁾だったという。1919年7月13日に青野ヶ原で実施された小野中学校対捕虜兵、姫路師範学校対捕虜兵の「球戦」²¹⁾は、その頃のサッカー試合の1つであろう。

板東収容所⁴²⁾でも久留米収容所¹⁸⁾でも、地元生徒が捕虜兵のスポーツ活動の参観に訪れているが、その際に生徒と捕虜兵がサッカーの試合までした形跡はない。地元中学生、師範学校生と捕虜兵とのサッカー交流は、青野原収容所におけるスポーツ活動の中で特筆すべき出来事である。こういうスポーツ交流ができるようになった背景として、1918年11月に調印された休戦条約後の「平和克服気分というものか」²¹⁾という社会状況を考えておかななくてはならない。

IV 捕虜兵のスポーツ要求と日本側の対応

1. 要求して実現したスポーツ

捕虜は何といっても囚われの身である。抑留4年目の1918年7月になっても、青野原収容所捕虜兵が赤十字国際委員会に訴え出た内容は、「上申・教育（会合）の抑圧」²⁹⁾「講演講習会活動の禁止」³²⁾という有様であった。事実、収容所側はそれまでに、「兒戲的喜遊」³⁰⁾注²⁰⁾の「風教上コノマシカラサル」²⁷⁾影響や伝染病を口実として遠足を中止したり³⁾、建造物損壊の罰としてスポーツをやらせないこと⁷⁾があった。

そのように管理された中で、「…、1915年以来、戦友たちは多くの要望を出していた。特にテニスコートへの要望が強く、2面が、適度の広さの2棟のバラックの間を利用して作られた」⁶⁾。砲術、土木、建築、造船、その他の技師がたくさんいたので、ケーゲルのバーンは自分達で作れた¹⁷⁾。「体操ハ…体操班ヲ構成シ自ラ資ヲ投シテ鐵棒、横木、超越臺等ヲ設ケ」た²⁸⁾。ビリヤード台は、購入された¹⁶⁾。ケーゲルの用具は遠く上海から取り寄せられた¹⁷⁾。捕虜兵が、自らの労働力と資力でスポーツする施設・用具を整えたのは、捕虜兵

の諸活動に寛大であったとされる板東収容所⁴⁰⁾だけではないのである。

しかし、スポーツはだれでも平等にやれたわけではない。2等砲兵であったKerstenが、「テニスコートはよく利用されたが、全員が利用できたというわけではなく、自分でラケットや球や靴等の装備を買ったり借りたり出来る者に限られていた」⁶⁾「金満家は2面テニスコートをつくりやっていた。われわれは少なくともケーゲルならできた」⁸⁾と記しているごとくである。

虜囚の生活であっても、ドイツ軍兵士にとって、スポーツはなお生活の一部であったが、与えられるよりも、要求し、できるようにしていく必要物であった。しかし全員が平等にできるものではなかった。

2. 捕虜兵を管理する立場とスポーツ観

俘虜情報局は、1916年8月、「實ニ彼等俘虜ノ運動癖ト讀書癖ハ國民性長所トモ称スベキ美点ナランカ、我國人ノ採テ以テ學ブベキコトタルベシ」²³⁾という見解を示している。そして、捕虜兵の帰国後には、「保健上ノ顧慮ヨリ」²⁷⁾、「保健並精神的慰藉ヲ与ヘンガ為」²⁸⁾、スポーツを許可していたと報告している。当時、ドイツ国内にドイツが開設していた捕虜収容所における、「系統的な身体運動（Körperübungen）は身体保養（Körperpflege）の一部である」³⁷⁾に似た考え方である。

そうかと思うと、彼らの「無遠慮」²³⁾には手を焼いており、同年10月に全国の捕虜収容所長が参集した会議では、「閑居不善ナサシメラムトセハ」²⁴⁾労役がもっともよいが、それができない場合「運動ヲ要求シ或ハ娛樂ヲ許シ」²⁴⁾暇にしないようにするのも一法などと、軍務局長が「口演」していた。しかし、スポーツ等による団結は逆に危険であるので、「健康ノ保持ノ見地ヨリ」²⁴⁾対処し、「決シテ優遇ノ意味ニ於テ之ヲ為スヘカラス」²⁴⁾という立場であった。第1次世界大戦中、ドイツに囚われていたイギリス人が、スポーツはそうであると気づかせない形で、体力を維持し、娯楽、退屈しのぎの手段として利用されたと述懐

している¹⁾。

捕虜兵にとって健康維持と気晴らしのために大切なスポーツではあったが、その要求を利用したスポーツの「適度なやらせ」を管理手段とする発想は、日本にもドイツにもあったのである。

3. スポーツ活動への対応の変化

すでに論じたように、1914年11月から1920年1月に至る姫路収容所と青野原収容所における捕虜兵の抑留期間中、彼らのスポーツ活動が拡大される契機は、①姫路から青野ヶ原への移転(<II 1>参照)、②抑留長期化に伴う緩和処置(<II 2>参照)、③休戦(<III>参照)と、大きく3回あった。それぞれ、ほぼ抑留1年目、3年目、4年目に該当する。特に、休戦後、帰国に至る1年数ヶ月におけるスポーツを含む諸活動の拡大は、板東収容所²⁰⁾や久留米収容所¹⁸⁾でも、そうであった^{注21)}。

収容所の管理姿勢は、赤十字国際委員会への訴え^{29, 32)}は別にして、処分された捕虜兵の人数を尺度にすれば、青野原収容所は、その開設初期においても久留米収容所ほど強圧的であったとは認めがたい^{注22)}。捕虜兵が帰国間近になった頃、収容所長は、新聞紙上で、自由に各種運動をさせていたと明言している¹⁵⁾。しかし、1916年8月の段階における俘虜情報局の把握では、「四國ニ於ケル各収容所ニ於テハ屡く^(ママ)、名古屋、青野原ニ在テハ稀ニ引卒^(ママ)外出ヲナシ運動シツ、アリ」²³⁾〔注〕下線筆者〕であった。そういう時期もあったのである。

青野原収容所が、捕虜兵のスポーツ活動に対して「寛大」であったかどうかについては、別途議論が必要である。

V 結 語

第1次世界大戦中の青野原収容所におけるドイツ軍捕虜兵のスポーツ活動について、文書、新聞史料、写真等から分析した。その結果、おおむね以下の事柄が明らかとなった。

1) 実施されていた主な種目は、トゥルネン、

サッカー、テニス、ケーゲル、ファウストバル、シュラークバル、ビリヤード、遠足であった。総体的に見て、種目では他の収容所と大差はない。

2) 組織的には、トゥルネンクラブが定着していた。

3) 行事の中では、トゥルネン祭、陸上競技大会が大きかった。

4) 地域交流として、中学校および師範学校とのサッカー試合があった。

5) 捕虜兵は、スポーツを要求して獲得した。しかし、スポーツをする条件は、全員に平等ではなかった。

6) 休戦は、捕虜兵のスポーツ活動拡大の大きな契機になった。

7) 捕虜を管理する側は、スポーツは心身の健康のためばかりでなく、捕虜兵を暇にさせない手段としても有効と考えていた。

注

注1) 地域の呼称としては青野ヶ原と「ヶ」を入れるのが一般的である。

注2) 当時の公文書では、「ヶ」を入れない青野原俘虜収容所がほとんどである。

注3) 俘虜は、現在あまり使用されない用語であるが、本論文では捕虜と同じ意味にとって差し支えない。固有名詞としての「…俘虜収容所」以外は、現在の慣用に従い捕虜の用語を使用する。

注4) オーストリア・ハンガリー帝国兵も含めてこう表現する。

注5) これは、『ディ・バラッケ』第1巻(鳴門市ドイツ館資料研究会, 1998), 『同前』第2巻(同前, 2001)として翻訳・出版されている。

注6) 山田が分析に用いている³⁸⁾。直訳すれば、『キャンプファイヤー』。シュトゥットガルト現代史図書館, 鳴門市ドイツ館所蔵。

注7) Hermann Kerstenの日記。旧ドイツ文字筆記体の文章がタイプライターで打ち直された物が、シュトゥットガルト現代史図書館に所蔵されている。表紙などはなく、pp. 21-38とpp. 37-65とに分散し、一部ページが重複している。

注8) Dirk van der Laan. 神戸育ち, 東京在住。文献19)の中の回想録の訳者。氏の父Heinrich

van der Laanは、板東収容所の捕虜兵だった。

注9) Hans-Joachim Schmidt. ザールラント州ホイスヴァイラー・クッツホーフ在住。購入した中古住宅を改修中に、元捕虜兵 Andreas Mailänder の遺品を発見された。その中には、青野原収容所に関する写真もある。

注10) 直訳すれば、『板東におけるわれわれのトゥルネン』。その表紙には、「1919年に日本・板東俘虜収容所印刷所で印刷された」(Gedruckt in der Lagerdruckerei des Kriegsgefangenenlagers Bando, Japan. 1919) とある。ドイツスポーツ大学ケルン図書館所蔵。

注11) 山田が分析に用いている³⁸⁾。直訳すれば、『トゥルネンとスポーツ』。現在、これとよく似た冊子名の、文献31)も久留米市教育委員会に所蔵されている。

注12) ビリヤードは「球突」⁴⁾と記されている。

注13) 陸軍省文書にも、「…撞球戦等所内ニ俘虜ノ個人経営ヲ許可」²⁷⁾とある。

注14) 文献24)における「第3節 ケルステン日記」の引用ではなく、筆者が原文と参照した訳文である。

注15) 姓名は正式には、Adalbert Freiherr Kuhn von Kuhnensfels. 回想録は、“Ernstes und Heiteres aus meiner ‘Furionenzzeit’” (私の「俘虜<Frio>時代」の真面目なことと愉快なこと)と題されている³⁶⁾。

注16) 素封家。当主は蓬萊公平氏。同家には、捕虜兵が使用していたビリヤード台が所蔵されている。

注17) 板東収容所にはHockey-Vereinigung³⁹⁾、久留米収容所にはHockeyklubないしStockballverein³¹⁾があった。

注18) 例えば、Tennisverein³⁹⁾、Faustballvereinigung³⁹⁾、Kegelbahngesellschaft⁴⁴⁾などが挙げられる。

注19) スポーツ組織ではないが、Theaterverein (演劇クラブ)の存在は、Kerstenの日記で確認できる⁹⁾。

注20) ドイツ軍捕虜兵がスポーツする様子を、子ども遊びのように見ていたのである。

注21) 富田³³⁾によれば、板東収容所における「行動の自由」の拡大には、休戦条約後とベルサイユ条約後(1919年6月)の2時期がある。山田³⁹⁾

によれば、板東収容所では休戦条約後、一時、運動や外出が控えられた時期がある。

注22) 1916年の処罰者人数は、久留米収容所132人、青野原収容所13人であった[文献18), p. 8]。

文 献

- 1) Cohen, I (1917) The Ruhleben Prison Camp: A Record of Nineteen Months' Internment. Dodd, Mead and Company: New York, p. 132.
- 2) Führer durch die Deutsch-Österr.-Ungarische Kunst-u. Gewerbe-Ausstellung, Kriegsgefangenenlager Aonogahara Japans 13-20. Dezember 1918. Gedruckt im Lager. シュトゥットガルト現代史図書館所蔵。
- 3) 藤原龍雄(2003)第1次世界大戦と姫路俘虜収容所。文化財だより(姫路市文化財保護協会), 50: 2-17.
- 4) 俘虜情報局(1917)大正三四年戦役俘虜寫真帖。p. 88-89.
- 5) 兵庫縣立小野中學校々友會(1920)校友會々報第拾參號。p. 59.
- 6) Kersten, H., Tagebuch, Maschinenschrift. p. 21.
- 7) Kersten, H., Ibid., p. 45.
- 8) Kersten, H., Ibid., p. 50.
- 9) Kersten, H., Ibid., p. 51.
- 10) Kersten, H., Ibid., p. 53.
- 11) Ketchum, J.D. (1965) Ruhleben: A Prison Camp Society. University of Toronto Press: Toronto, p. 221.
- 12) Klein, U. (1993) Deutsche Kriegsgefangene in japanischem Gewahrsam 1914-1920 Ein Sonderfall, Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Philosophischen Fakultäten der Albert-Ludwig-Universität zu Freiburg i. Br.
- 13) 神戸大学クォーター編集委員会(2002)神戸大学クォーター 4: 2002年秋号。
- 14) 神戸新聞, 1919. 6. 30.
- 15) 神戸新聞, 1919. 12. 25.
- 16) 神戸又新日報, 1915. 5. 24.
- 17) 神戸又新日報, 1915. 12. 22.
- 18) 久留米市教育委員会(2003)ドイツ軍兵士と久留米—久留米俘虜収容所II—(久留米市文化財調査報告書195集, p. 12, p. 93.
- 19) 習志野市教育委員会編(2001)ドイツ兵士の見

- たニッポン—習志野俘虜収容所 1915—1920. 丸善出版事業部：東京，pp. 72-76.
- 20) 鳴門市ドイツ館資料研究会編（2000）どこにしようと，そこがドイツだ. 鳴門市. pp. 37-38.
- 21) 大阪朝日新聞，1919. 7. 13.
- 22) 大津留厚・福島幸宏編（2004）AONOGAHARA 捕虜兵の世界—Kriegsgefangenenlager Aonogahara, 小野市史編纂専門委員会（2004）小野市史第3巻（本編III）別冊. 小野市.
- 23) 陸軍省，大正三年乃至九年戦役俘虜に関する書類，「俘虜収容所情況ノ件報告」，欧受第1142号. 俘発1844号. 防衛庁防衛研究所図書館所蔵.
- 24) 陸軍省，上掲書類，「俘虜収容所長會同ノ際軍務局長口演事項」.
- 25) 陸軍省，上掲書類，「西班牙公使訪問情況報告」，欧受第1385号其2，青俘830号.
- 26) 陸軍省，上掲書類，「展覽會開催の件」，欧受第1758号. 青俘1138号.
- 27) 陸軍省，上掲書類，「俘虜収容所開設」.
- 28) 陸軍省，上掲書類，「七，姫路及青野原収容所」.
- 29) ルーファ，ルンガス：吉田景保訳注（1978）ドイツ俘虜の郵便. 駅通郵趣会：東京，p. 11.
- 30) 鷲城新聞，1914. 12. 29.
- 31) Turnen und Sport im Kriegsgefangenenlager Kurume 1915-1919.
- 32) 富田 弘・富田 弘先生遺著刊行会（1991）板東俘虜収容所—日独戦争とドイツ人俘虜—. 法政大学出版局：東京，pp. 50-51.
- 33) 富田，上掲書. p. 149.
- 34) Weiland, H. und Leopold, K. (1931) In Feindeshand, Die Gefangaenschaft im Weltkriege in Einzeldarstellungen. Bundesvereinigung der ehemaligen österreichischen Kriegsgefangenen 2Bde: Wien.
- 35) Weiland, H. und Leopold, K., Ibid., Bd. 2. p. 83.
- 36) Weiland, H. und Leopold, K., Ibid., pp. 76-82.
- 37) Weiland, H. und Leopold, K., Ibid., p. 183.
- 38) 山田理恵（1998）俘虜生活とスポーツ—第1次大戦下の日本におけるドイツ兵俘虜の場合—，不味堂出版：東京.
- 39) 山田，上掲書，p. 31.
- 40) 山田，上掲書，pp. 33-36.
- 41) 山田，上掲書，pp. 37-46.
- 42) 山田，上掲書，pp. 56-59.
- 43) 山田，上掲書，p. 92.
- 44) 山田，上掲書，p. 113.
- 45) 山田，上掲書，p. 181.
- 46) 山田，上掲書，p. 182.
- 47) 山田，上掲書，pp. 194-195.

（平成16年4月12日受付）
（平成16年11月6日受理）